

「福音を恥としない」（ローマー・八〜一七）

1 果たすべき責任

ローマの信徒への手紙を学び始めています。今日は二回目です。この手紙、新約聖書で一番長い手紙です。端的にもっとも重要な手紙とっていいと思います。ここから神の言葉を聞きたいと願っています。

神の言葉と申しましたが、神は語りかけてくださると私どもは信じています。聖書の言葉によって語りかけてくださいます。聖霊の助けを祈り、心を静めて耳を傾けたいものです。

先週は、この手紙の著者、使徒パウロについて、手紙が書かれた背景なども含めて少し申し上げました。

思い出していたきたいのは、キリスト教徒の迫害者として歴史に登場したパウロが、復活のイエスとの出会いによって回心し、人生を一八〇度転換したということです。彼は福音のために働く者となったのです。パウロは紀元前後の生まれなので、新たな人生に歩み出したのは三〇歳頃です。

以来、三〇年、地中海世界を、伝道のために旅をつづけ、ローマの信徒への手紙を書いたとき、年齢は、五〇代も終わりに近づいていました。そしてこの数年後、六〇歳ぐらいで、斬首により、ローマで殉教したと言われています。後代、パウロの墓を守るための教会も建てられ（四世紀）、いまは観光名所の一つです。この手紙が彼の最後の手紙ということになります。

もちろんパウロ自身は、これが、自分の最後の手紙などと考えてはいなかったでしょう。実際、とくに今日の箇所など読めば、なるほどこれまで、ローマに行くことを企てながら妨げられてきた、何らかの意味で神の許しがなかった、でも願いは変わっていないことを知るので。

福音の使徒として三〇年あまり歩んできて、まことに多くの労苦を、彼は重ねてきました（コリント二、一一・一六以下）。しかし今日の箇所では、そうした困難な過去の歩みを思い出しているではありません。自らの使命を見つめ、さらに前進して行こうとしています。

果たすべき責任があります。それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです（一四〜一五節）。

使徒パウロが、晩年、ローマに行こうとした、ローマの教会を訪ねようとした理由を、ここで再確認しておきます。

先週申し上げたように、パウロは、これから、地中海の東の端、スペインまで伝道に行こうとしているのです。そのためローマを経由し、ローマの教会に送り出されることを願っているのです。

このことは今日の箇所には必ずしもはっきり出ていませんが、この手紙の終わりの

ところに書かれています(一五・二二以下)。それと関連してそこにもう一つ重要なことをパウロは書いています。それはローマに行く前にエルサレムの教会を訪ねるという計画です。当時とても貧しくなっていたエルサレム教会に、異邦人教会、とくにギリシアの諸教会から集めた献金を届けるためです。

今日は、その意味について触れることをしません。いずれにせよ、エルサレムに行った後にローマに行く、ローマの教会に立ち寄り、ローマを経由してスペインまで行くという、壮大な伝道計画をもっていたのです。こうしたパウロの伝道の使命への情熱が、ローマ書の書き出しにも現れている、このことを今日はまず申し上げておきたいと思います。

2 互いに励まし合う

使徒としてのこうした大きな計画をいながら、いまパウロは、ローマに行くことを切望しています。とはいえ、自分のそうした計画実現のために、ローマの教会を何か利用しようとしているわけではありません。

それは、今日の箇所のはじめから書いているところに明らかです。彼は、ローマの教会の「信仰」が「全世界」に言い伝えられていることを神に感謝し(八節)、祈るときには、いつもローマの教会を思い起こし(九節)、何か実りを得たいと望んでいます(一三節)。ローマの教会を愛する心がここにはあります。それは最終章にたくさん(一六章)の教会員の名前を上げているところにも現れています(一六章)。

さてその上で、一―一二節に書いていることは、パウロが、ローマの教会との関連で自分の務めをどのように見ていたか、それを明らかにするだけでなく、使徒と教会の関係、さらには信徒と信徒、もっと大きく言えば、教会の交わりをどう考えていたかも示しています。

あなたがたにぜひ会いたいのは、霊の賜物をいくらでも分け与えて、力になりたいからです。あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです。(一―一二節)

この箇所は、覚えていらっしやらないだろうという失礼になりますが(お許しください)、二〇一七年九月に、俗にいうお見合い説教で私が取り上げた箇所です。牧師としてこういう気持ちでいるということを、これらの聖句に託してその時申し上げたものです。いまも変わりません。

少し個人的な感想も交えて申し上げますと、私は牧師としてこの教会が三つ目ですが、いつもいま読んだような気分であったわけではありません。最初の任地の大洲教会では、楽しく過ごしましたが、牧師としては私も若く、最初の任地でもあり、気があったかもしれません。信濃町教会は、いわゆる大教会ですから、別の意味で負っていたと思います。とても、このパウロの言葉のようではなかったということです。神学を講ずる時を長く与えられて、ようやく肩の力が抜けて、この聖句がよく分かってきたところです。

一一節と一二節、二節を読みましたが、内容的には同じことを言っています。というのも新共同訳には訳出されていませんが、一二節の頭に、というのとは、とか、すなわち、とか訳されています。新しい聖書協会共同訳では「というよりも」と訳しています。それもいいかも知れません。「あなたがたに会いたいと切に望むのは、霊の賜物をあなたがたに幾らかでも分け与えて、力づけたいからです。というよりも、あなたがたのところで、お互いに持っている信仰によって、共に励まし合いたいです」。

この二つの節を比べてみると、対照的な言葉遣いになっています。一一節のほうでは、筆者パウロは、自分を、あくまで能動的な存在として語っているのに対して、つまり「分け与えて、力になりたい」、こちらが分け与え力となるということです。一二節のほうは、これもそのように訳されていないので、分かりにくいことを申し上げて恐縮なのですが、そこでは、筆者パウロは自分を受ける側として書いているのです。こうです、あなたがたのところで、お互いの信仰によって互いに慰められたいのです。パウロもここで自らを慰められる存在と見ています。互いに慰め合うというより、互いが互いによって慰められることによって、神様により、わたしもあなたがたも、パウロもそしてローマの信徒も、慰められるということが起こるのだということをおこらば述べているのではないのでしょうか。

教会を支配したり、信徒を管理したり、教え込んだりすることが、パウロのローマ行きの目的ではありませんでした。教会を治めるのはただひとりキリストです（ヘブライ三・六）。この方のもとでパウロ自身与える者であるばかりでなく、受ける者となること、このことが大切であったのです。互いの信仰によって、互いの信仰ですから、当然そこには緊張もあるでしょうけれども、互いの信仰によって励まし合うことが大切なのです。その兄弟姉妹（姉妹兄弟）の互いの交わりの中にこそ、イエス・キリストのご支配、主としての聖霊の働きが豊かに映し出され、現れるのです。

3 信仰による義

ここまで私ども、先週の箇所と今日の箇所、じつはもともと大切な言葉を十分説き明かさずにきました。それは、お気づきのように、「福音」という言葉です。多く出て来ているわけではありませんが、はじめから顔を出しながら（一、二、九、一五節）、今日の箇所の終わりでは（一六〜一七節）、「福音」が、この手紙のまさに主題として名指しされています。

パウロをここまで走らせてきたその力、結局、それは、パウロ自身がそれに生かされ、それを信じ、それを伝えることをもって「果たすべき責任」としている福音そのものだとおぼろげに感じます。

ですから問題は福音です。ローマの信徒への手紙の主題は福音です。福音とは何かです。その意味で、一六〜一七節は、福音こそ、この手紙で私が語ることだと宣言している箇所です。

いま私は福音と言っています。元の言葉（ユーアンゲリオン）の意味は、良い知ら

せ、朗報ですが、しかしパウロにとって福音という言葉は、もっと具体的な内容をもっていました。簡単にいえば、福音という言葉で、いつもイエス・キリストのことを考えていたのです。福音とは、イエス・キリストについての、あるいはこの方を巡る良い知らせではなくて、イエス・キリストその方なのです。

それゆえに、一六―一七節は、福音を、イエス・キリストと読み替えて読んでもいいのです。こうです。「わたしはイエス・キリストを恥としない。イエス・キリストはユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからです。イエス・キリストには、神の義が啓示されていますが、それは、はじめから終わりまで、信仰を通して実現されるのです。『正しい者〔義人〕は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」。

これらの聖句の中心にあるのは、「イエス・キリスト〔福音〕には、神の義が啓示されています」です。これを理解する上で、少し先の四章二五節の言葉を参考にしたと思います。

イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです（四・二五）

この言葉を次のように説明することもできます。イエス・キリスト、この方は十字架にかけられて死んだ方です。十字架で殺されるといことは、罪人（ざいにん）として、とり分け政治的逆逆者として、裁きを受けて死んだということです。むしろその裁判の不当性はいうまでもありません。それでもこの死の意味は、神によって罰せられたところにあります。キリストご自身の罪のゆえではありません。そうではなくて、キリストが私どもの罪を引き受け、担い、私どもの代わりに罰せられたのです。人の罪、人の悪をそのままにしておくなら、そのような神は神ではない。神は義であるからです。罪を罰することにおいて神は神なのです。

もし私どもが私どもの罪に対する神の罰を受けたら、私どもはどうに滅ぼされていることでしょうか。どのようなになっても文句の言いようのないほど、私どもは罪深いからです。罪深い私どもは自分が暗い影の中に立っているのを見いだします。しかしそれでよいのです。暗いところに立っていることに気がつけば。なぜなら、それは、キリストの十字架の長い、濃い影の中だからです。その中に立つなら、私どもはすでに罰せられているのです。その中に立つなら、私どもすでに救われています。義が与えられます。十字架のもとに立たないなら、赦しもない。イエス・キリストの十字架の影の中に立つことによって私どもは救われます。

かくて神の義は、福音、すなわち、イエス・キリストにおいて啓示されます。神は罪を罰することにおいて自ら義であることを示し、それによって私どもも義とされるのです（三・二六）。それがパウロの生きる力となり、私どもの生きる力となるのです。そしてそれは、それをそのまま、アーメンと言って受け入れるすべての人にとって神の力なのです。私どもは差し出されたイエス・キリストの救いをそのまま受け入れます。この、そのまま受け入れることを聖書は信仰と呼びます。私ども、信仰によって救われ義とされるのです。

（二〇二三年一月一五日）